

平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

イカナゴ類

オオイカナゴ *Ammodytes heian*

イカナゴ *A. japonicus*

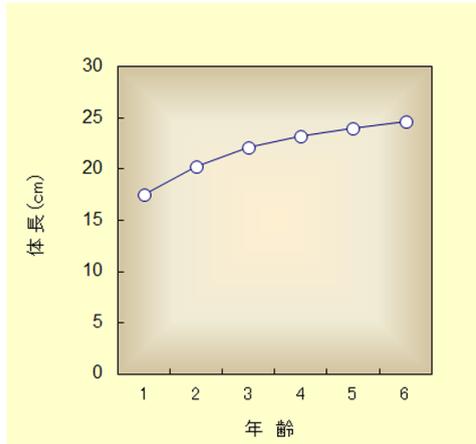
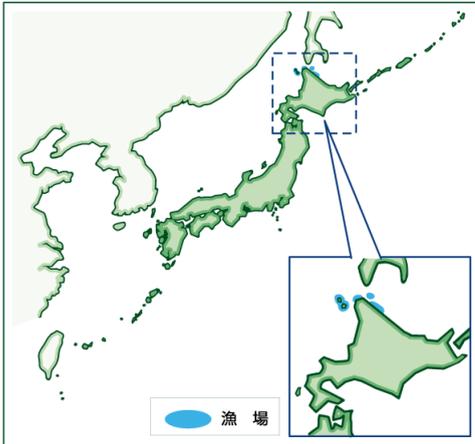
キタイカナゴ *A. hexapterus*

系群名 宗谷海峡
担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命： 6歳以上
 成熟開始年齢： 3歳（大部分）
 産卵期・産卵場： イカナゴは3月下旬～5月上旬、稚内、枝幸および利尻島・礼文島周辺の沿岸域、キタイカナゴは11月下旬～12月、サハリン周辺の沿岸域、オオイカナゴについては上述の知見と大きく相違ないと推察されるが、詳細は不明
 索餌期・索餌場： 宗谷海峡周辺の水深40～80mの砂礫地帯
 食性： 未成魚はカイアシ類などの浮遊性甲殻類や珪藻類、成魚はカイアシ類、端脚類、オキアミ類、十脚類、ヤムシ類、魚類
 捕食者： 魚類、海獣類のトドなど

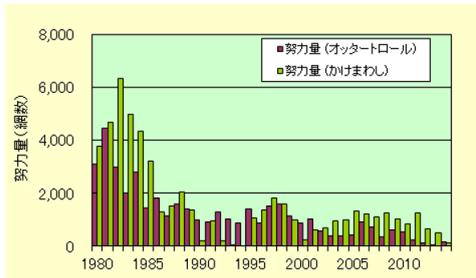
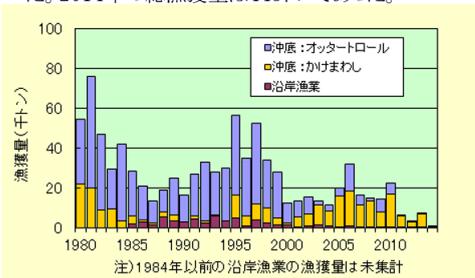


漁業の特徴

本資源の大部分は沖合底びき網(沖底)によって漁獲される。小型定置網、すくい網および敷網などの沿岸漁業でも漁獲されるが、その量は少ない。沖底(オッターコントロール、かけまわし)は、主に宗谷海峡東方海域において、1～6歳魚の索餌群を漁獲対象として6～9月に実施されている。沿岸漁業では、利尻島・礼文島周辺海域や稚内沿岸において、0～3歳魚を4～7月に漁獲している。

漁獲の動向

沖底の漁獲量は、1982年以降減少し、1987年には1.2万トンに落ち込んだが、1995年には5.2万トンに回復した。2000年以降は1.0万～2.0万トンの低い水準で推移した。2011年以降は1.0万トンを下回り、2014年には過去最低の429トンであった。沿岸漁業も2000年以降は50～1,200トンの低い水準で推移し、2014年は過去最低の14トンであった。2014年の総漁獲量は443トンであった。

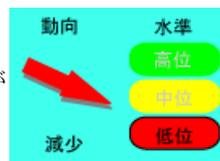


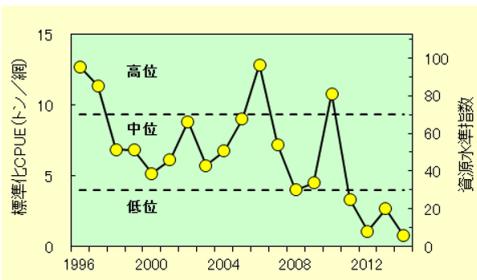
資源評価法

1996年以降の沖底の標準化CPUEを資源量指標値とし、資源状態を判断した。ただし、本資源は日本水域とロシア水域に跨って分布しているため、CPUEに基づく資源状態の判断には不確実性が伴う。なお、CPUE標準化には一般化線形混合モデルを適用し、月、漁法、およびそれらの交互作用による効果を除去したCPUEを推定した。

資源状態

1996～2014年までの標準化CPUEの平均値を50として、各年の相対値を水準指数とした。50±20の範囲を中位水準、それ以下を低位水準、それ以上を高位水準とした。2014年の水準指数は6であったため、資源水準は低位と判断した。また、過去5年(2010～2014年)の標準化CPUEの推移から、資源動向は減少と判断した。近年のイカナゴ類の資源水準が低位に留まっているのは、豊度の高い年級群が加入していないことが要因と考えられる。2014年までの漁獲状況から、2010～2012年級群の加入状況は良くないと推察される。





管理方策

稚内根拠のオッターコントロール船の隻数は2011年度までの資源回復計画によって現在では1隻となり、かけまわし船は漁模様次第で自主的に操業を規制している。沖底による漁獲努力量は2014年に過去最低となったが、資源状態が良くなっているとは判断できないため、これまでの資源回復計画での取り組み(操業期間の短縮、休漁日の設定)を継続しながら、今後の加入状況に十分注視していく必要がある。

資源評価のまとめ

- 1996年以降の沖底の標準化CPUEに基づき資源状態を判断した
- 資源水準は低位、動向は減少
- 2010～2012年級群の加入状況は良くないと推察される

管理方策のまとめ

- 北海道は、2004年に宗谷海峡のイカナゴを資源回復計画の対象種に指定した(2011年一部改変)
- 2012年度以降は資源管理指針の下、漁獲努力量削減の取り組みを継続して実施している
- 資源の回復を推進するため、これまでの資源回復計画での取り組みを継続しながら、今後の加入状況に十分注視していく必要がある

執筆者: 岡本 俊・加賀敏樹・船本鉄一郎・山下紀生

資源評価は毎年更新されます。